

O3-047

一般の小児科クリニックでも可能な肥満指導の提案

岡村 暁子^{1,2}、小池 明美^{1,3}¹札幌市学校医協議会²うめつ小児科³宮の沢小池こどもクリニック

札幌市学校医協議会では20年以上にわたり、肥満の実態調査を行い、その対策を検討してきた。2019年から成長曲線の有効活用を開始し、肥満度50%以上の高度肥満に加えて進行性肥満の子どもたちも抽出する基準を作成した。この基準により、高度肥満、進行性肥満の子どもたちが3-5%自動抽出され、かかりつけ医の小児科クリニック受診することとなった。しかし一般的な小児科クリニックではこれらの子どもが受診しても、その対応に戸惑っている施設が多いことが予想される。演者らがこれまで小児科クリニックで行ってきた肥満外来を振り返り、その経験からクリニックでも可能な肥満指導を提案する。

1. 学校健診の成長曲線などの資料から、肥満の重症度、肥満の期間や進行状況を確認する。
2. 診察・血液検査で二次性肥満の可能性、重症合併症の有無を確認する。これらの存在がある症例は専門機関に紹介する。
3. 肥満の原因を確認する。いつから肥満であるのか、食事の状況、家族の理解、家族の就労などの環境などを問診で聞いていく。
4. 栄養指導は 栄養士同席による指導や、小児科医だけで簡単な指導を行う場合がある。本人の特性、家族の環境・考え方を理解して、正論を押し付けずに少しずつ問題点を修正していく。
5. 運動療法はスポーツインストラクターによる運動指導を取り入れていたが、現在は自宅でも簡単にかつ持続可能な方法を指導している。

肥満は本人も家族も学校から指摘されても病識がないことが多い。実際困っていることがほとんどないため、受診勧奨を受けても受診に懐疑的である。そのためなぜ肥満の治療が必要なのかの説明が大切である。その後の指導でも日常の生活に直結する食事の改善は難しい。しかし無理をさせないペースでは、目に見えた改善が得られないため、諦めて脱落してしまう症例も多い。最初に肥満度が改善することを実感してもらうことが大切と考えている。我々の外来では肥満解消まで達したのは26%、軽度肥満以下になったのは45%であった。また程度の差はあるが指導中に一定の肥満の改善を得られたのは8割近くに達している。

一般小児科医が通常診療の中でも十分効果のある肥満診療が可能であることを理解し、子どもや家族の近くにいる小児科医によって肥満診療が進むことを期待する。

O3-048

日本人幼児の貧血実態に関する研究
-非侵襲的測定法による大規模貧血スクリーニングの有用性評価-井川 愛¹、神野 慎治¹、三橋扶佐子²、中村 吉孝³、堤 ちはる⁴¹株式会社 明治 乳酸菌研究所²日本歯科大学生命歯学部 共同利用研究センター³仙台青葉学院短期大学 栄養学科⁴相模女子大学栄養科学部 健康栄養学科

【背景/目的】

近年、パルスオキシメーター Rad-67TM(Masimo社) (以下Rad-67) を用いた日本人幼児対象の精度研究が実施され、その有用性が報告されている (Arai Y. Pediatr Res 2023)。本研究では、当該装置を用いた1-5歳の日本人幼児の大規模測定調査により、非侵襲的ヘモグロビン測定値 (SpHb) の分布状況の把握と対象者背景因子との関係性検証を行い、非侵襲的測定法による貧血スクリーニングの有用性評価を試みた。

【方法】

(株)明治が実施する幼児イベントにおいて、Rad-67を用いてSpHbを測定した。代諾者がSpHbの提供を拒否しなかった児を研究対象とし、SpHbおよび背景情報 (月齢、性別、出生時体重、給食およびフォローアップミルクAの喫食状況) を無記名で取得した (相模女子大学「ヒトを対象とする研究倫理審査委員会」承認済み)。SpHbの分布状況を男女別に集計し、WHOの貧血判定基準値を下回った児の割合の算出と、SpHbを目的変数とする重回帰分析を行った。

【結果】

1-5歳児4422名を解析対象とした。SpHbの分布状況の男女別評価では、WHOの貧血判定基準値を下回った児の割合は年齢順に、男児で7.8、2.8、3.4、3.2、4.7%、女児で6.5、2.6、4.7、4.7、7.1%であった。男女を合わせたSpHbの平均値は年齢の増加に伴い増加した (12.9、13.2、13.2、13.2、13.3 g/dL)。また、年齢毎のSpHbの平均値は、いずれの年齢でも男児が女児を上回っていた。重回帰分析では月齢と性別が独立してSpHbの説明変数となることが確認された ($p<0.01$)。なお重回帰分析では、有意ではないもののフォローアップミルクAの喫食がSpHbに影響している傾向が認められた ($p=0.091$)。

【考察】

採血法による海外の調査では、幼児の貧血割合は米国で3.2%、豪州で2.0%と報告されている。非侵襲的測定法を用いた本研究では、日本で貧血と推定される幼児の割合がそれらの先進国と同等から最大で約4倍に達することが示された。また、本研究から月齢と性別が独立してSpHbに影響していることが確認された。以上より、Rad-67によるSpHbの測定は幼児向け貧血スクリーニングに有用であると考えられた。